

北海道の産業を守るため奮闘しよう

北海道交運共闘が第10回総会

4月18日、北海道交運共闘の第10回定期総会が開かれました。新型コロナウイルス感染拡大の防止の観点から、昨年と同様に幹事会メンバーを中心とした総会としました。

三上議長はあいさつで、「ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から2か月経ち、札幌でも抗議行動が続いている。地道に声をあげ、戦争反対の世論をつくって包囲していくことを粘り強く続けていこう」と訴えるとともに「道内は大雪の影響で生活に支障も出た。赤字を生み出す新幹線に金がつぎ込まれているが、山線（小樽～長万部間）はバス転換され、道民の足を蔑ろにしている政治が続いている。このような大きな問題が北海道にもたくさん横たわっている。北海道にある産業を守るためにもみなさんとともに奮闘したい」と述べました。

宮澤事務局長（建交労）から1年間のたたかひの主な経過と2022年度運動方針案が提案され、討論では各分野のとりくみについて全員が発言しました。

建交労鉄道本部からは「今春闘ではJR北海道で21年ぶりのベアを実現したが、これまで労働者に我慢させてきた経過があり、深刻になっている青年労働者の離職問題に歯止めをかけるためにも、さらに魅力ある会社にしていくことが重要だ」との発言がありました。

また、建交労から「北海道の一人親方のダンプ労働者は時間単価で就労しており賃金相場が低い。北海道新幹線のトンネル工事での使用促進闘争で、ゼネコン・下請け等との交渉で1日5万円を確保させている。それらの賃金を地場単価に反映させていく運動が必要だ」と発言しました。

公務（航空・気象・運輸）からは、「増員されたがまだまだ体制拡充は必要だ。コロナ禍で事業収入が減った事業者が活用できる補助金業務でも人員が増員されれば“もっと早く”活用してもらえ業者が増える」との発言もありました。

新年度役員には、三上友衛議長（道労連議長）、森国教副議長（建交労）などを再選し、新事務局長に自交総連道地連の吉根清三さんが選出されました。

北海道鉄道本部が「船釣り交流会」

北海道鉄道本部は4月17日、毎年恒例の「カレイ船釣り交流会」を行い11人が参加しました。小樽港から遊漁船を貸し切り、小樽水族館沖で腕を競いました。天候は曇りで、寒くはなかったものの前日に接近していた台風1号の影響からかうねりが残っていましたが、今年はカレイの型も大きく（平均30cm前後）巻き上げるにも力が入り、同時に3枚4枚が掛かるなど大物への期待の声があがっていました。建交労道本部の森国委員長と宮澤書記長もゲスト参加しましたが、撮影担当の宮澤書記長がKOされたため、船上で大物を釣り上げた記念写真は残念ながら残っておらず、帰港してからの集合写真で腕前を發揮してくれました。釣果は、総重量優勝に42cmの特大マガレイをヒットさせ17.9kgを釣り上げた道本部委員長・森国さん、2位に苫小牧支部・竹田さん、3位が小樽支部・加藤さんでした。身長賞は47cmのイシモチガレイを釣った小樽支部・金丸さん、珍魚賞は久しぶりにお目にかかったカナガシラを仕留めた追分支部・鷺沢さんがゲットしました。密を避ける感染対策で大きな船を準備しておこなった交流会は久しぶりに顔を合わせた仲間たちが近況を報告し合い、釣れた魚の大きさや一度に釣り上げた枚数で盛り上がり楽しい一日を過ごしました。次回は6月3日に室蘭支部主催で伊達市黄金沖にて開催する予定になっています。